

第19回

連合は「誰もが参加可能な共生社会の実現」に向けて東京2020パラリンピック開催を全力で応援中。パラスポーツへの理解と共感を広げる「ものがたり」を連載でお届けする。

本連載の初回に登場いただいたパラリンピアン河合純さんが、今年1月、日本パラリンピック委員会（JPC）の委員長に就任した。初のアスリート出身委員長であり、東京2020パラリンピック競技大会日本代表選手団長も務める。新型コロナウイルスの影響で1年延期となったが、東京大会の成功に向けて、委員長としての意気込みを聞くとともに、パラリンピックを盛り上げるために何ができるのか、河合委員長と相原事務局長が率直に語り合った。【進行/田中 徳 連合連帯活動局部長】

【対談実施日3月17日】

前向きに捉え、万全の準備を

田中 JPC委員長への就任、おめでとうございます。東京大会は1年の延期となりましたが、その受け止めは？

河合 本番を迎える大切な年に

前任からバトンを引き継ぐ責任の重さに身の引き締まる思いがしています。就任にあたって、JPCの鳥原会長からは2つのことを託されました。1つは、東京パラリンピックの成功に全力を尽くすこと。すべての会場を満員にする「フルスタジアム」と、選手たちが

最大限活躍できる「ベストパフォーマンス」を達成する。2つめは、2030年を見据えて、東京大会のその後につながる礎を築くこと。東京大会の経験を踏まえ、JPCのあり方やパラスポーツの振興についてビジョンや行動計画を策定する。私は、この2つのミッションを全力で成し遂げることを誓ってお受けしました。加えて、4代目にして初のアスリート出身委員長として、みずからの経験を生かし、アスリートを中心においた組織体制・組織運営を構築したいの思いもあります。

東京大会の延期については、一致団結して開幕に向けた準備を進めようという時、新型コロナウイルスの感染拡大が日々深刻化している中での決定です。国内外で困難に陥っている方々に思いを馳

せながら、一日も早い終息に向けて、私たち一人ひとりにできることは何かを考え、行動していきたい。また選手たちには、この時間をしっかりと使って自分自身を成長させてほしい。JPCとしては、選手たちへのケアに万全を期すとともに、パラリンピックが果たす役割や東京大会のビジョンを社会に浸透させる活動の時間が伸びたものと前向きに受け止め、この難局をみなさんと一緒に乗り越えていきたいと考えています。

相原 史上初の延期決定はショックでしたが、連合としても、選手、関係者、ボランティア、観戦者をはじめ、すべての人々の健康と国際社会全体の安全を考慮した判断と受け止めました。安全対策を二層強化し、国民生活への影響や延期に伴う課題に対して万全の対



河合純一

日本パラリンピック委員会
委員長

相原康伸

連合事務局長

この難局を超えよう！ みんなで "I'm POSSIBLE"

特別対談

応を求めているかと思っています。

連合は、これまで東京パラリンピックの成功に向けて、組合員の関心拡大や観戦の促進、大会・都市ボランティアとしての参加などの取り組みを積極的に進めてきました。開催は1年延びますが、引き続き全力で応援していきたいと思っています。

河合 ありがとうございます。大変心強いです。

「人間の可能性の祭典」

田中 改めて東京大会の成功に向けた思いとは？

河合 オリンピックは「平和の祭典」と言われますが、パラリンピックは「人間の可能性の祭典」だと思いませんか。障がいのあるパラアスリートに対しては、おそらくここまでできないだろうという思い込みがある。でも、実際にパラアスリートの圧倒的なパフォーマンスに触れた瞬間、その思い込みが覆され、人間が持つ無限の可能性に気づかされる。同時に自分自身の可能性にも気づくことが出来るんです。

英語で「不可能」は「Impossible」ですが、ソチパラリンピックの閉会式で、車いすの選手が壁に書

いてあった「Impossible」の「I」と「m」の間にアポストロフィを書き入れました。「In possible」（私はできる）と。この「I'm POSSIBLE」は、パラリンピック教育の教材タイトルにもなっているんですが、まさにパラリンピックを通して、人間の眠れる可能性、社会の潜在能力を再認識していく。そういう「人間の可能性の祭典」として東京大会を成功させたいと、改めて思います。

相原 「人間の可能性の祭典」、いい言葉ですね。

労働組合の活動って、人が集まって、エネルギーを感じ合って高めていくことが基本なんです。それが今、人が集まること自体が制約される。春季生活闘争の集いも、メーカーも、通常開催ができない。もちろん、1カ所に集まらなくても、ICTを活用して情報を届けたり、ライブ配信でメッセージを送ることもできます。ただ、そういう代替手段が様々な中で、それでも人が集まることに意味があるとしたら、そこにどういうエネルギーを充満させるべきなのか。どういう新しい発想やイ

ンスピレーションを得ようとするのか。そのことが、今問われていると思いませんか。パラリンピックの延期も、人々が結集することの意味を問い直し、その可能性を改めて見出そうとする契機ではないかと。

河合 同感です。やはりピンチはチャンスだと思っただけですね。今はこんなに制約を受けているけれども、だからこそ、これまでの体制や活動の問題点や課題が浮き彫りになって、やるべきことがはっきり見えてくるという面もある。職場でも、おそらく一気に「働き方改革」が進んだのではないでしょう。あるいは、学校が一斉休校になって、今更ながら、子育てと仕事の両立への支援が不十分なこと気づかされたのではないのでしょうか。この危機的状況から、

進行 田中 徳
連合連帯活動局部長



相原康伸 あいはら・やすのぶ
連合事務局長

「日常の様々なニーズに対応できる職場や社会にどう変えていくのか」が問われるべきなのだと思います。

最高のパフォーマンスを 発揮できる環境整備

田中 開幕に向けた課題は？

河合 ホテルや交通機関のバリアフリーを含め、準備は順調に進んでいたのですが、新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、様々な大会や選考会が中止になり、本大会も延期が決定して、不安を感じている選手は少なくありません。ただ、選手は与えられた環境でベストを尽くすしかない。JPCとしては、この1年有余を、選手たち

のケアと最高のパフォーマンスを発揮できる環境整備に全力を挙げたいと思っています。

田中 私たちにできることは？

河合 JPCは、東京大会でのメダル目標を20個としました。ただ、その数を達成することが目的ではありません。選手たちが悔いのない最高のパフォーマンスを発揮できる環境をつくる。そこで選手たちが積み重ねてきた努力を出し切る。その結果としてメダルがついてくる。そう考えています。

自分自身の経験から言っても、メダルを意識しすぎると良い結果は得られません。現役時代、私にとって水泳は自己表現の一つであり、パラリンピックは自分らしさ

を伝える場でした。この泳ぎにすべてを出し切ろうという気持ちで臨むと、それ以外のことを考える必要がなくなり、記録が伸びて目標に届くんです。

東京大会は自国開催であり、史上最大規模の日本選手団になると思います。選手団長として、すべての選手が持てる力を出し切れるようサポートしていきたい。そして、みなさんには、パラリンピックの会場で最高のパフォーマンスに出会い、その感動を心からの応援に代えて大会を盛り上げてほしいと思います。

相原 活躍できる環境を整えれば、結果はついてくる。おっしゃる通りですね。連合も、働く人たちの環境を整え、日々健康に安全にやりがいをもって働けるように活動しています。そのことがより良い社会につながっていくはずだと…共感しました。

引退後を負擔えたアスリートの キャリア形成プログラム

田中 東京大会の、その後を見据えたビジョンについては？

も大きな一歩です。東京パラリンピックをきっかけとした様々な社会変革の動きを、着実に進めていくビジョンをしっかり打ち出したと思います。

田中 最後に連合に期待することをお聞かせください。

河合 「働くこと」は、生きていく上でとても重要です。ブラック企業が社会問題化し、「働くこと」にネガティブなイメージを持つ若者が増えていますが、連合には、職場の問題を解決して、働くことの意義や楽しさをもっと伝えてほしいと思います。と言いながら、先日45歳になって、これからやりたいことの「ウィッシュリスト100項目」をつくってみました、

河合 人が人である限りスポーツはなくなることはない。だから、企業スポンサーの継続やパラスポーツのファン拡大に引き続き取り組み、パラスポーツの価値を発信できるアスリートを育てていくことが一つの柱です。

アスリートの引退後を見据えたキャリア形成も課題です。私もそうでしたが、選手時代は自分のパフォーマンスを最大化することを最優先に考えていました。でも、引退して企業や団体で仕事をする事になれば、組織のパフォーマンスを最大化するという別のアプローチが必要です。そのため経験や実績を積み重ねることができるキャリア形成プログラムをつくりたいと思います。

相原 連合は今期の運動方針で「真の多様性の実現」を掲げました。一流のパラアスリートは、高い集中力や努力を惜しまないひたむきさを持っています。つねに感謝を忘れず、周囲の人々に支えられていることを思慮する力が備わっています。そのセカンドキャリアを考える際には、企業側の姿勢も重要です。障がい者雇用率2%を達

仕事に関する目標は意外と少なかったんです。働くことは大事だけど、家族や地域との関係も大切にしていけば、もっと人生が豊かになると気づきました。

連合は、東京パラリンピックの最大のサポーターですが、同時に働く人たちの人生をまるごとサポートする存在としても、そのパワーを発揮していただけたらと思います。

相原 今日の対談では、制約がある社会情勢だからこそ、人々が出会うことの価値、そして、直接お会いし、生の声を聞き、河合さんにはか発せられない言葉と経験があることを再認識しました。東京大会を通じて新しい価値観を発信していくというメッセージをしっかりと受け止めました。連合は、思いを共有し、サポーターの先頭に立ちたいと思います。これから1年、できることはまだまだたくさんあります。まずは、この対談を通して、河合さんの言葉をたくさんの人に届けたいと心から思います。

田中 ありがとうございます。

【対談実施日3月17日】



河合純一 かわい・じゅんいち
日本パラリンピック委員会 (JPC) 委員長
東京2020パラリンピック競技大会
日本代表選手団団長

1975年静岡県生まれ。5歳より水泳を始め、15歳で全盲となる。1992年、17歳でパラリンピック(バルセロナ大会)に初出場。1996年アトランタ大会では金メダル獲得。以後、シドニー、アテネ、北京、ロンドンの各大会に連続出場。通算獲得メダル数は21個(金5個、銀9個、銅7個)。その功績から国際パラリンピック委員会(IPC)の殿堂入りを果たす。静岡県内の中学校で8年間教員を務めたのち、2013年に日本身体障がい者水泳連盟会長に就任。日本パラリンピック委員会アスリート委員会委員長、国立スポーツ科学センター研究員などを歴任し、2020年1月、日本パラリンピック委員会委員長に就任。

成するためだけではなく、障がいを持つ人たちの知見や経験を、企業の中で活かせないとしたら、社会の財産を活かしきれいていないことになる。人間の可能性にも通じる話です。そういう価値観が多くの人に共有される東京大会にしたいですね。

河合 私も、ダイバーシティこそインベーションを生むと信じています。雇用率2%達成をめざすのではなく、魅力ある企業風土を追求する中で、障がいのある人たちの活用を進めていく。結果として雇用率もクリアできる。そんなふうになればと思います。

東京大会では、障がいのある方々が組織委員会のスタッフとし

て働いています。本番ではボランティアとしても活動します。ダイバーシティやインクルージョンといわれる共生社会の姿がそこに見られるはず。大会が終わって、職場や地域に戻ったスタッフやボランティアが、障がいのある人が働いている姿がそこになく、違和感を持つてくれたら、それが社会を変える一つの大きなきっかけになるのではないかと期待もあります。

実は、今国会に学校をバリアフリーにするという法案が提出されているんです。災害時に避難所にもなる公共施設である学校が、今までバリアフリーの対象でなかったことが驚きなんです。これ